忘れ世

十二

詞を若とをり

[V. 19]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 19
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

（涼廿七ノ三月ノ比之廿九ノ夕ノ事也）
前秋（さい）家（ゆう）の此（冷泉一入門之）集りのこと。中家（なつが）の此心まいれてもよ
ほし男ゝ給。ご後かなるれとふしひまでとりこて
ゝるれうしろゝもなしと思しやれど。大夜（涼ム）も院（矢）
まもさつこしめさんことをもぐりまて二条院り
（秋家と）けうしなんことをもこのこびいおぼしとまりて。
こゝしゝ御がかまもてなしまへれど。おほかゝ乃
ことゝもはさりもちておやめさ男ゝ給。院（朱ム）もいと
口おしくおぼしめせど。人もろかれば此をうそこ
るどこえまゝるを。（秋家入門ノ事）その日まゝて。えなしおほかそ
ひどもれぐしのもこうちこぐりの箱がうごこのもこ
どもよれつるなるぞくさぐの此こさ箱どもくゝ思

えかう。まるなきさ海に。百ぶのほかをおほくとさ
まほふまで心ことなさしのへさをこまへり。おとぐ
こゑひもをんなとかゐてよりやおぼしまうけれん。
いとわざとがましかめり。夜もわろこまへるほど
まてかくなんと女別当あらんぞきすこゞれぐしの
ことのるつるをこ給ふつさをずこ海うまなる海
めきて。めづしきさ海なりさしぐしのとこ乃
こゝろぐる
朱 われぢるそんしどぐしとうごとまてもな
けき中と神やいさめし。おとぐこれをあらんじ
つけて。ぞしめぐらすよいとうこゞけるくへと

おしえて。ひがれこころなるひのあやまくなる身を
つゝて。かれ（秋字ノ）ぐるり給しほど。れ（朱ノ）心まおもほしけん
ことかうきへてりへりなて。（秋字）もれ心ざしともさげ
なべき程まかるこがひめれあるをいるまおぼさる
ん。れ位（ムロ）をさり抱きげかなて。世をうしめしとや
おぼすらん。まれまなりて心うごくべきふしかれと。
おぼしつゞけ給ふ。いとおしくなまくかくあれがち
なること紙せひきじめて。うろぐるしくおぼし
なやますらん。つゝしともおもひきこえしかど。
又ちつしく色なるれ心ざんをなど。おもひこゞれ
なて。とばかりうちながめなへり。（深付）このれか色なれ

ことなどもかきつゝれ衣(あれ)ならばされて。なめぐらく。
けうとてもうかはいひしひとことをりへり
てもれいはまぞうなしさと計(地ぞう)やすけんれつひの祿(うく)
たれぐに給ひす。おとぐいれりへりといと席(ゆか)しうおぼ
をぐ。えつかし給ひず。院(朱)のれ有様ハ女にてえてまつら
まほしき後。このれけるひもなげなしずいとよされ
あまひなめるをうち(冷泉)いまゝいとけなくおりし
ますめるにうく引こゞへ字ゆうを。人をれず抱しとや
見すんなどよくさことをさへ見しやまて。むつつ
ぶれ給へど。かふにまなりておぼしとぐむべきことよし
あしのいとぐもあるべきを海にのるまひをさて。

むつましう見まゐ。すりのさいね（参議修理大夫）をふたしう（きう）川かうま
川るべくのゆゑて。うちる（内裏）まりぬぬ。うけゞりうるおや（涼心）
ざ夜まはきうしめされじと。俤（朱）をつゝミこさこえのすてれ
とふしひぢりとこをゆへりよさ女ぢうなどいも
とよりおほかうこや（秋宗）なれば。さとがちなり志もまいり
川ぞひていとまなくけもひあしまほ志くおもれ
おもをましうばいかまひありて見しいるづつましと。
芳のれ心ざ夜見し出るまほ。おほかるの世まつけてこ。
おしうあさしうし人のれありさ夜ぞや。さこそ
えあらぬもれなりそればよしありし方いなをすく
れて。ぬれしありどとまおもひいでさこえ語

中（なつが）家もうちまぞおもしましけるうへ（冷泉ん）いえづら
しきへ（秋文廿二夕 冷泉十三夕之）まいり給ときこしめしされば、いとう
けうしうれうろづひしておもしまして、ほどよ
まいいとじうざれおとなびゆへり、家（なつが詞）もかくまぐ
りきひとまいり給を、れこうろづひして、みえ
こそまつしをゆまへときこゝ給ふ、人（冷泉ん）きれずおと
なはちづしうやあらんとおぼしけるを、いとく（秋文）
夜ふけてまうのぼりゆへりいとけしまし、げ
おほとうまて、さぞやうるあへうまるけるひのし
こまへれば、いと（冷泉ん）おかしとおぼしかり、こき（沙女）姿（ぞん）まは、れ
らうじつけられば、むつましうあはれに心やすく

おもほしこれも人ざ面もいろうしありちづくし
げるおとぐのれもてなしもやむごとなくよそほし
それがおなづりよくおぼされて。れとれねなどは
ひとしくしおなへどうちとけたるれつらはあそびに。
ひるなどつたしを給ことはおなるがちるおりします
稚中納言はせふ心ありて男に給けるり。うく来り
なてれむすめなきしろふさ夜にてさつしひ給を。
うくくにやすらずおぼしべし。院には彼らしの
もこのれりへりれんどしにつけても。れ心もなれ
がるうりそりそのころおとぐのまつりなへ分り。
れ物紙こ面やうなりことのついでに秋宮のらざり

給しことゝ。さ紀ぐものゆひ出れば。男(朱ノ)しいでゆて。
さおもふ心なんありしなどいえあらもし給ひず。
おとゞ(淳ん)もうろれかしき男がかまはあらで。今ぐ
いかまあぼしらるとゆうしきまどうりれ出す
のゆひ出るまあ(朱ノ)れなるれかしこれあさはう
ちしぎこゆれば。いとくおしくおぼせめでこうしと
おもほし(朱ノ)しこゝまけるれ(秋家ノ)ちうちいやうなるおし
さまうとゆうしうしひこさうてこまへどさし(秋家と)まえこ
こてまつり給ちぬとれ(淳ノ)うおもほせいとを(秋家ノ事地)もりう
まて。夢まもいたけらうれふるまひあらばこそ。
をのづらほのこえゆふついでもあらぬ心まくこさ

れけるひのこゝろまさまれば。こまり給まゝにいと
あらまほしともひきそしのみりぐすき雨なくて
ふるさゝろさゝろひのみへば。無名の家すゝくとも
（こきでんと秋家とこ）
えおもほしさず。（冷泉）こうどおとなびのひなぞ。（無名の山）さり
ともえおもほしすてじとぞまちゐし給。ふる（こきでん秋家）取乃
れおぼしども。とりぐにいどんこまへるに。（冷）うへも
よろづのことにすぐれて。恋をけうある抽におぼし
たり。さてくこのまをのへばにやまなくうしき給。
秋家の女れいとおしうりを給へれば。これより
（冷ノ）れこゝろうつりてつくしを給ひ。うきうかんさき給。
あゞのつきへぐもこのこゝまもぶをば。（冷ノ）れこゝろ

とゞめてありしきまれるおもほしこれがまして（決定）
おりしげるゝ人のころだへあるさ度ままほしまくぞ
うきすさひちまめりしこそひかしてとうくかで
うちやすしひのへるさ度らうしげさる（冷ノ）れ心ちうて
いとしげうけこをのてありしうりけるれおもひ
まされるを（ねん）程ゞ納えきゝのておくまでのどく
しくいまめさのへるれころまて。これ人ほおとり
なんやとおぼしけてぞぐれるゞどもれ
めしとりて。いとじういまし（にがてあすかんへ）めて。まるちまさ度なる
恐どもなを。ほちまさうとどもほうさあつめさを給。抱給
恐こそ。心ぞへそして三家あるもれなれとて。おもし

ろく心ぞ人ありけぐりをえりつくりを給れいたむ
十二月ノ急ニ
月なきの急もこゝろれぬさ夜ゝ云の葉をうきけぐ
さて。冷ゝ
ゆくんぞさせ給。けぐとおりしうしたくれば。まる
うさぐん
こゝろまてもこれを冷ゝ
ゆくんずるゝ。心やすくもさるも
いで給ず。いといたくひめて。この冷ゝ方ゝ
ゆくんぞ
ゝもてつる
らき給を。おしゝらうじ
ろさぐんノ
ゝ人べ。おとゞきゝのひて
ゆ
ゝ
れ様中納云のゆこゝろのつくしさそ。おら
きゝ
ゝまりがゝゝかれなどけしひのふ。あれがちよりく
して。心やすくもゆくんぞさせず。なやましきゝ
いとめぐ。夜しや。こゝぐいのゆ急どもの侍ふ。まいら
きんとそうしなて。ゆ
れよふるきあくしき

ゑどもいりたり。こづしどもひらきなて。妙ぎことと
もろもにいまめしきもそれくとえりとくのへ
さきぬふ。長恨哥。王昭君ちなどやうなるゑは。おもしろく
衣ちれどことのいこあるは。こゝろはこそまろ
じとえりとぐめ給。かれたびの内目記のたこをも
とりいでさきなて。このつゐでにぞ。妙君にもこせ
こそまろり給ふ。こゝろふくしでいまゝんひと
ぐる。すうし抱きひしたん人は。洞おしむまじく衣
ちり。まいてにすれがたくそのよの夢をおぼし
さますありちるきれこゝろどもにはとりもへし
かれしうおぼしいでしろ。いまゝでこゝを給はしざるも

六

けうしみなぞきこゝ給けり

ひとりぬてちがめしよりハあまれすむかるを
きてぞこゝろべかりけり。なげつゝちきはなすぐさゝん
ち後しまれをとの給いとあはれとなげして
うきめしそのありよりもふハ又是まし
うさはかるなるぶか。中ぞ(河)ぞだりまはこをこて
まつるべき物ちりかるをちまりまじき一でうげ。
さすがはしくのあさ後。さやかはこしかるを。
きりぬふつゝでにもかれあしの家れぞまづいか
にとなげしやしめときれまもちきかうしるども
あつめしりとさくなて。桂中納言いとゞこゝろを

けくてぢくへうしひまれかぎり。いよくとく
のへおふ。やよひの十日のほどなれば。元もうらくか
まて。人のころもの。び。抱おもしろきありちかに。
内つうりもさるべきさきちゑどまれひまなれば。こゝ
やうのことゞもまて。れるぐくらし給を。おなじ
をれれんじどころもまきりめべくて。そまろ
らんのれころつきて。いとつぎとあつめまいしを。
おへりこなるなることを。海ぐ抱ほり。抱絵ゑまに海
やうまおつしさまきりめりを。梅つぼのれうこれ。
いよくへの抱絵名ゆへあかりぎり。こゝき。夜は。
そのれせるをぐしくおしきかぎりをえりて

かをのへれば、うちこゝめ見ゆめしさるや
なほば、いとゞよろしくまされつゝ、人の女房なるを、
かしあかくぶり、ぞれかれは、あらでさべめあへるを、
ひごろのこゝろはすなり。中務もさしつゝきこえまへる
ころまそぞくめくつくて、まそぞくゝくゆして
ことなれがれとこなるひもなきこそりしめくらんなど、
この人ぞまりぐは源ずるなど、さうしめて、ひだり
みぎよくてつくゝを孫む。めつぎのれうくまは、八い
あてきのすけ、侍従のあてし、少将の命婦、右は
大式のあてきのすけ、中将の命婦、兵衛命婦ばかりを、
さぶらはせ給ふ心ゆくきいとゞしくぞあまそ、こゝろぐま

あしそふ。うちつきどもおしときてめしてまづ
抱從のいできたじめれおやなる。うけさりのおきれ
まうけのそしかげをあはきてあしそふ。なる行乃
（左方ノ詞）
よくまふりまけることおしきふしもなけれど。
うくやびめれ山よれまごりまもけがれぜ。たろうる
おもひのぼれうちぎりうく。神世のことなめれど。
あきたうなる女めをよばぬなんかしといふ。右ハ
（右方ノ詞）
うくやびめのうぼりけんくもねた。げるをよばぬ
ことなれがこれもしりがたし。この世のちぎりハ行の
中なむすびそれがうぐれる人のことくそこそ
めれ。ひとの前のうちへてしけめど。もしさぎたい

うしろきはひかりはなくなりなりあべ志
おほしがちぐのうぐ〇をすてゝひ〇ずゝ乃おもひ
うてとうさまこさえうもいとあへなしゝゝもちの
たそのまゝとのほうらいのふうき心をしりなぐら
いけうりてむの枝(えだ)にさずをつけうをわやまち
とあす忠いこをのあふゝていきれつゝゆなかり
巨勢相見　紀貫之
うんやがうまうらのうきをだいしておうむしさうさ乃
表(へうし)紫檀(しへん)の軸(ぢく)よれつ〇のうそひなり。としうげい
右方ノ詞右をかめ〻意
もげしき波風(なみ)におぼれしゝぬ雲(くゝ)まもれられし
うどはさしてゆきけう方のうろざしもうなひて
つぬる人のこうどにもつゞくまくもありがくうさ

ぎえの程をひろめおもをのうしけるふうきころを
いふ。恵のさ夜ももろうしと日のもとをとる
ならべて。おもしろきことぞおもをなしびなしといふ。
しろきしきし。おもをさへうしきるゝ玉の軸(ぢく)なり。
恵はつ(常則)のりてはうち(道風)ぎなれば。い夜めりしうお
りしけるめもかゝやくまでうも。左(右ノ勝之)はそのこと
もりおし。つぎは伊(た)勢物語に。正(た)ご信(ね此物語今世ニ不傳)をあいきて。まぐ
さぐめやしず。これも古いおもしろくまぎりしく
うちけうりもじめちうき世のありさ夜を
かきくろはおりしうこどころまさるべいなりし
いせのうこれ(平内侍)ふかき心をこどしずてかりなし

絵と浪やけつべきこれつゆのあざことのひさけく
ろひかざれりにとされておりひしがゑをやらす
べきとあしそひかゆるゝ右のまけ
大貳ノ内侍
雲のうへにおもひのぼれりころにいふひろの
そこもとろうまぞこゝろ。正三位ノ第子ニあるへ人也
芸濤の大君のうゑうさは。
げにまてがゝれど。ざいぐ中将の名をば。えらく
さじとのゝまはをて。
左衛之
ゝや
茲つ分
こゝろめこそうしふれぬしめとしへましいせ
とのあまれ名をやしげめん。かやうの女ごとまて。
こゝりがしくあしそふに。一巻まことの紫を
つくしてえもいひやらず。こゝあさもりなりけり

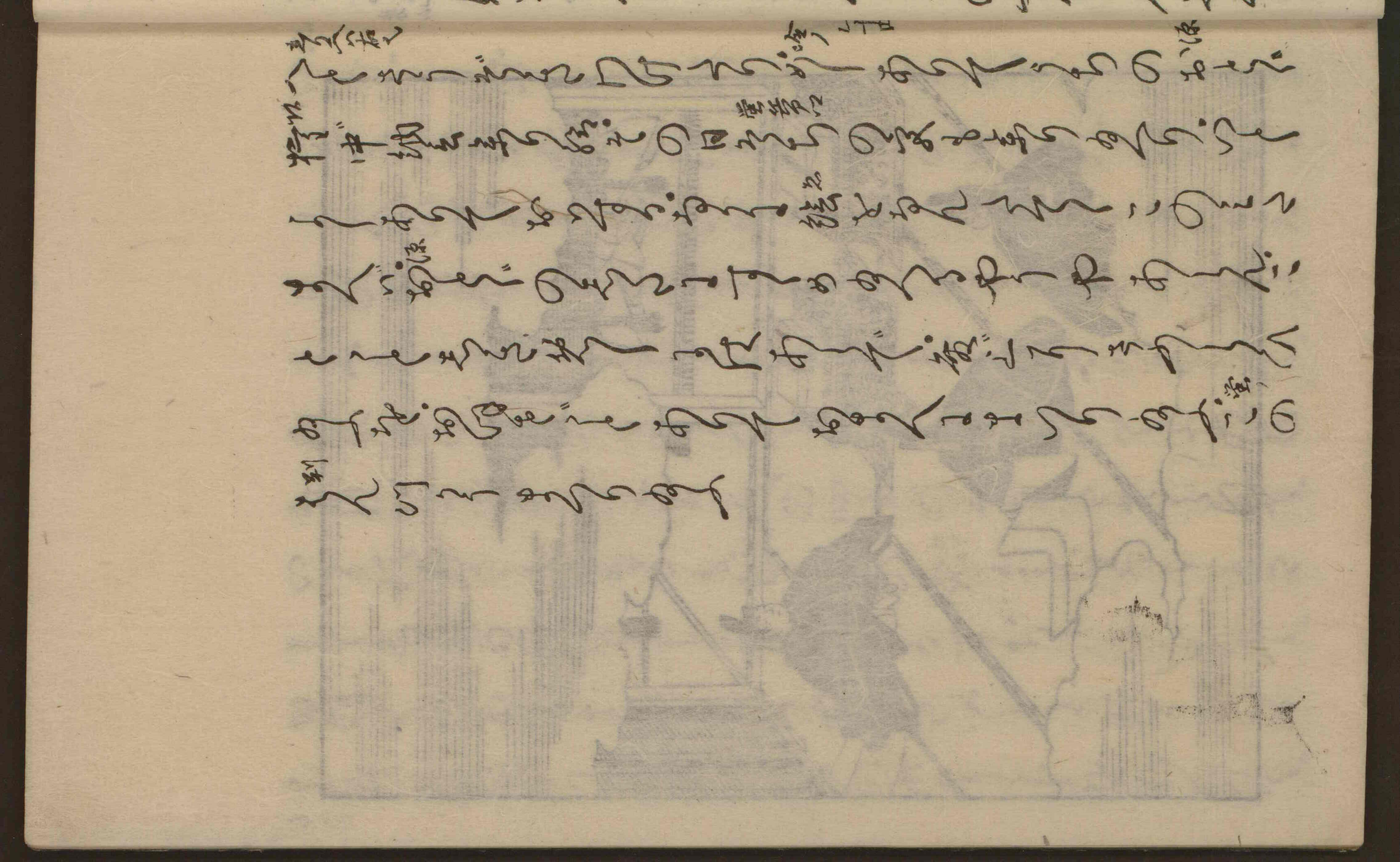
人どもは志まゝゆゆしがれど。冷うへのも家のも
うこさしをぐるえこぎ。いといこうひめきをこまふ。
深ふおとぐまいりなて。うくさりぐまあらそひさんぐ
うろぎんどもおしくえして。詞おもじろは此前に
て。このうちまけさぐめんとのなひなりぬ。うくな
こともやとうまて。えしそれば。中なうまもことなるは
えりとぐめ給へなまかすまあしのふこまきは。
おぼとこ所ありてとりまぎさせ給へりなり。中は納言もその
此心おとゝ渡。この此の世にはこぐうくおもしろき
うこ志をとくのふことをおめれしこいとなみ
なり。今はあしくあうんことは何いなきことなり。

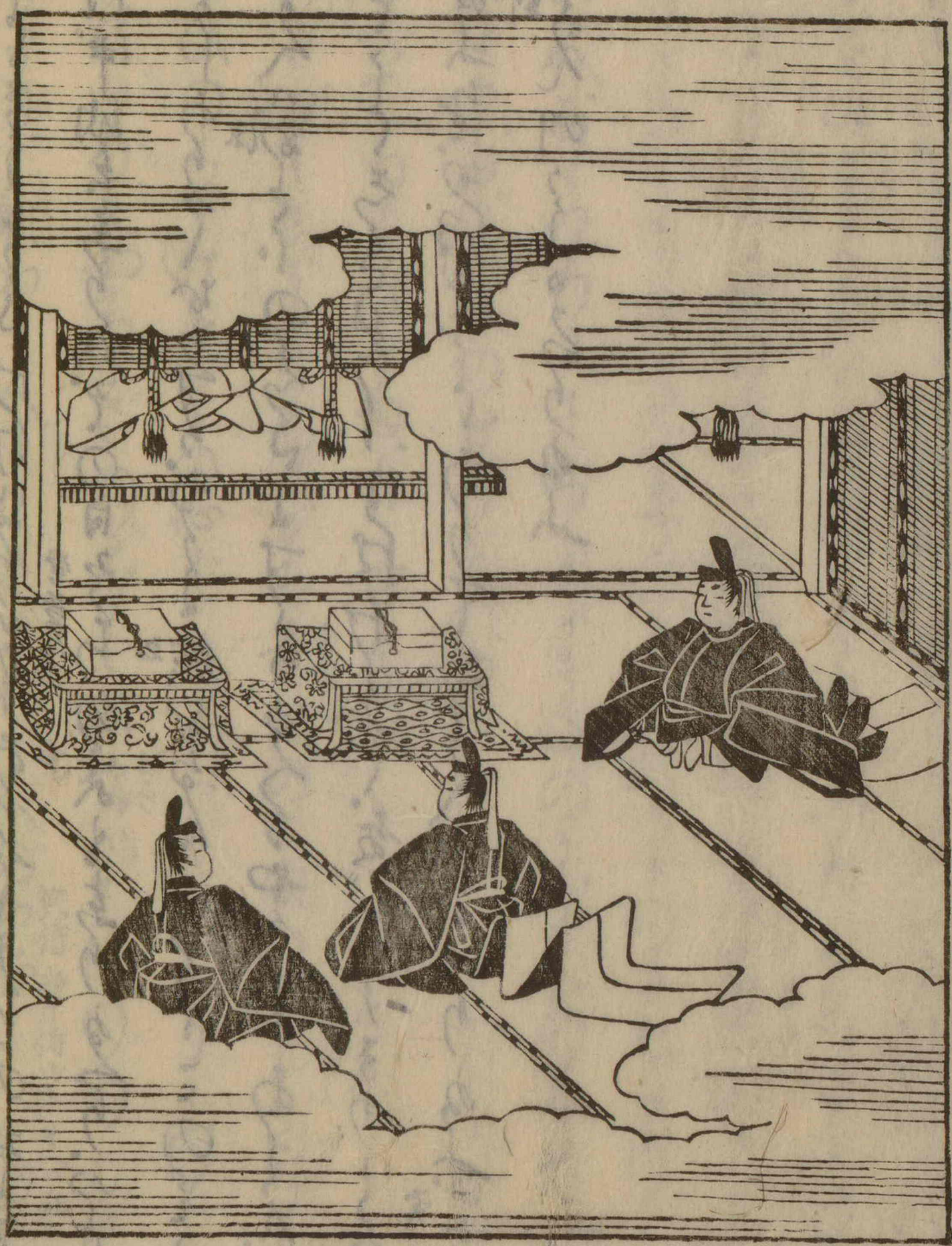
ごぞありけんかぎりなきそとのうまへど。伊納云(以)こ人
まもうきをで。けりなきまどをあけてうゝを治めかを。
院(朱心)まもうゝとさうをなて。むめつぼ(秋家)りし此忌ど
もこそまつしきなへり。としのうちのきち忌ぜ乃。
おもしろくけうあるを。芳のごぞどものとりぐり
けりは。延喜(えんぎ)の此て(桐壺ノ門)げうゝとのうろうゝ殆なへ
なは。まるつ(朱ノ)げ此世のこともうゝをなへるまさは。
此秋家のかぎり給し日のだごくぞんのごしさ。
此心は志こそ御しかれば。かくべきやうゝちしく
御きこれて。きん(云望)もちがけうまけれるが。いと
いとしきをこそまつしをなへり。えんは(遠)すきくう

ぢんのもとゝまゐるじき心ぞのさ海なるどいと心海め
うし。れせうそこいたぐこと紫まて。院（朱）の殿ぞよも
さふふ。左近中将（さこんのちうしやう）をれつひまてありかれぢぐ
ぢんのれこしまきろ前のかうぐしきま
（朱）身こそうくしめれ泪かなれそのこのころの
うちをけまれしもまず。とのこあり。男も給いぢらん
もいとうらじけるければ。（秋家ん）ろうしく覚しなぐら。男の
れんぢしのもしをいさゝかあり事
（秋家）しめれうちは覚ゝしまあらぬ心ちまて神代の
ことも今ぞこひしきどて覚ぐのうらのみ
つゝそ来しを給。れつひのろくなどいとなまめん

し。院（朱ム）のミかど御くんずりまゐぐりなくあそれと
おぼしまぞ。おりし世をとりかへさ海ほしく覚し
ける。おとゞ（源地）をも一くしとしひきこえさせ給けむ
うし。ゑ（源ナのうきめあるしるえ）まし事の御むくひよやすけん。院の御恩も。
ゑ（聖帝）さいの家よりつくもりて。（こさでんハ臣ノ家ノいらゐれハ之）この女御の御方よりも
おほくまいるべし。内侍のかん（朏月）の君も。かやうせん御
このましさは人ますぐれて。おりしさき海にとるも
なしけるあつめ給。そのひとさゞめて（絶合なり）。よはかなり
やうなれど。おりしさき海にまちかなりしなして。
ひぐり（秋文）こさざ（こうさでん）の御恩ぜもまいしをうまふ。女ぐうの
さゝひ（墨盤下之）ほしまゐ（法殿まてノ忍合之）おましよそいとて。（右ハ小之 左ハ南之 西ひきこの給ふ神之）ゆられとうくぐに

まうれてさかしふ、あつぶんへいくこうらうでんのすれて（清涼殿ノ西之）
まぞのくころもけくさかしふたちきさんのそ
こる、すまうのけそく、ちこさまれまもち、紫地（むらさきぢ）のつくの
ましきうちちこさいゑびぞめみうくのきちあり、ゆくは
六人おりいろまさくしがさるのうぐさ、おくえんち
紅まかぢがさるのとりもみあり、もそがくらあういあど
あうそあうすこゐ、たいぢんのらくま、をんうりの
志さつくゑうちきつさを青地（あをぢ）のこ段のましきおし
ゆひのくさけそくの心だんへあどいとりまありけるは
あ浅いろまやあうさのつぐさ、山吹がさねのお　こえん（冷）
こうそりえれおまんまうさまうぶへの女房まんまへ志あうも（典侍　掌侍亦之）

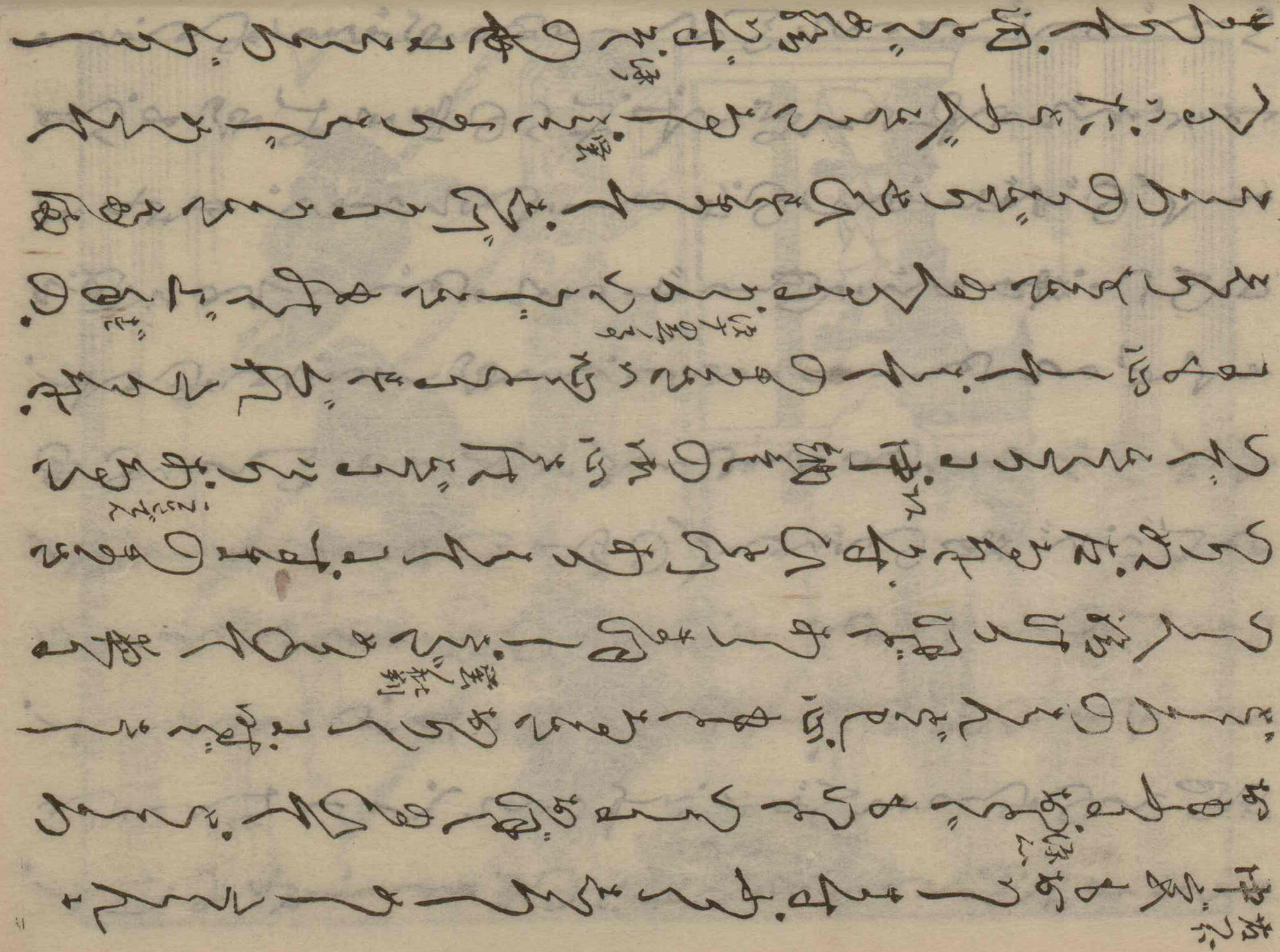




比いそじうげまうさいけらしゐめ思どもありさら
まえさぐかやまと語ちずれいの宮されぬもいま
しへのぶぶどもの。おもしろさことぐもをえ
らひつ。筆とぐこほしぶりさちがしさうさ夜さ
とへんかたちしとうまうこゑもかぎりありて。
山水のゆたかなりこころぶへとえこをけくさぬ抱
なれば。さぐ筆のかぎり人の心まけりこそられて。
いまれおさうなりもむかしの絵(あと)まちぶるくこのざ
をしきおれおもしろとこゆうすぢハまきりて。
おほくのあらそひどもかふハかたぐまけうあり
ことぐもおほり。おさがれいのれきうじをあけて。

朝餉ノ西ノ障子ニ

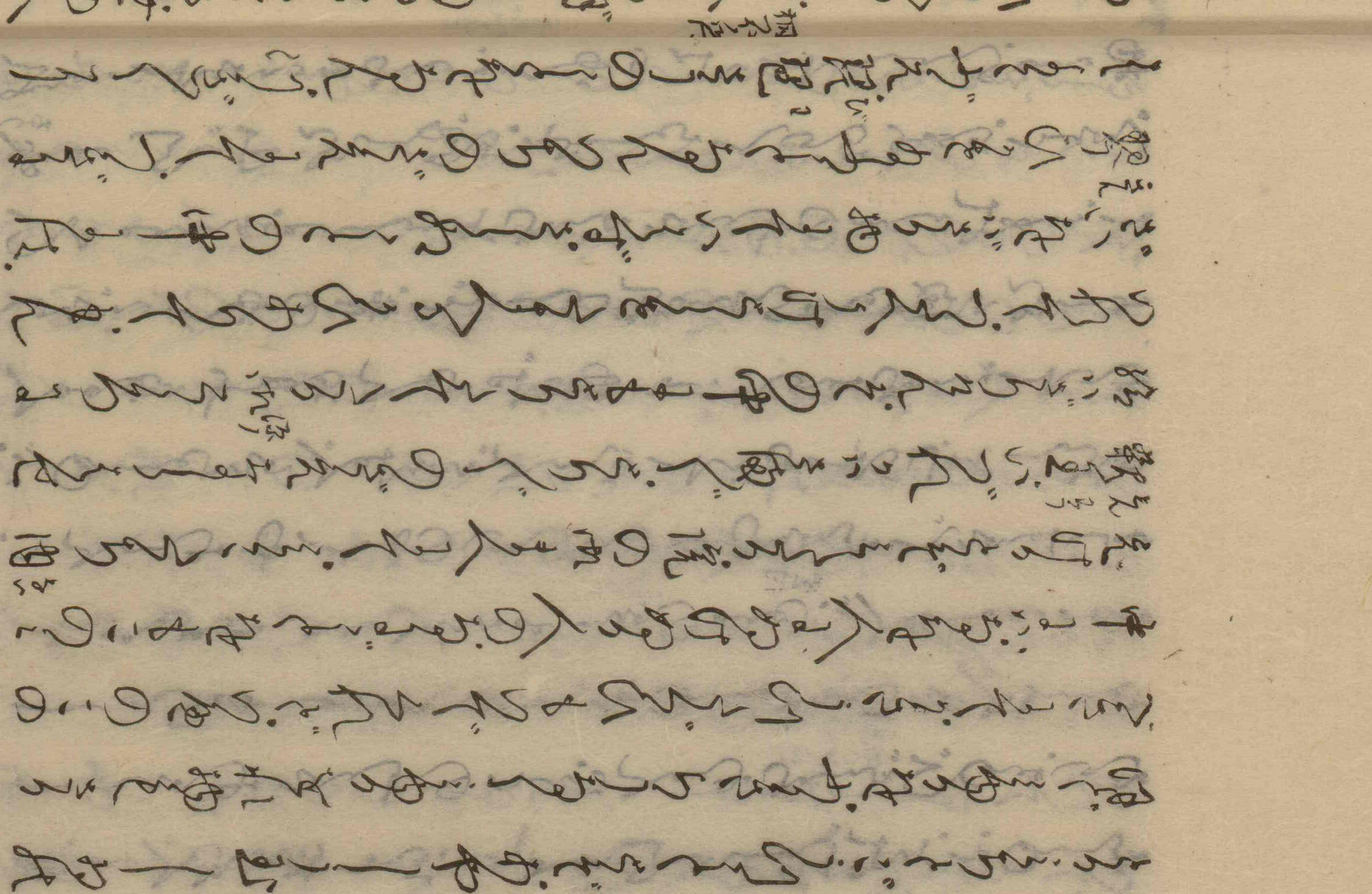
右つぶ
中宮もなりします。ゆくしろしめしこそんに
おもふる。深ん おとゞもいとゞいうまおぼしのひて。どころ
どころのそんども心もとなきありくに。時ぐさし
いへ給けるほどあらまほしさぐめるて。雲ノ杜判 ある
いりぬ。左ゐをかずひとりあるまのまさ
いでさるゝ。中納そのれ心さけどるはりおゐる
まも心してさてのまさは心とるとぐれさるを。
えりとさゝめへるるゝ。淡ナの芝ノ事 かゝりいうじきもれくどもの。
こゝろのうぐりせひとましてさげうるうきゑ面
へるはたとゝべきるゝ。雲 こゝよりもじめくて
まつりて。泪とゞめ給はず。淡ノ その世にこゝろぐりし



うるしとおぼしてほどよりもおりしげん有さ面
此心よおぼしけんことどもこぐ今のやうにこそ
所のさ面おぼつるきうらくいそのくれなく
うきあらりしこまへりさうのまゝかんなれ所ぐる
うきまぎてまゐのくちしき日記にはあらぞ哀
なる方などもまじれるさぐひゆうこれもこと
ことおぼさず・さ面ぐのれ絵のけうこれにこれ
うつりそておそれにおもしろしよろづこれを
しゆづりてひぐらしになりぬ東あをかく
ちくなる所どる・拙いとあそれにおぼされて此
うそしけるどまいりつゝでにむうしのれ物語ども

地しづかにして人は心ゆくばかりなるところなれ
べきに。ありあけのはかなし。あはれ山がはよ遊
てゞよみそめしそのかなしさこゝろをとゞむるそひ
よしあしをよろこびいだしけれど。筆のゆくまゝにかゝり
ありてこゝろよりいでゆかずなんありける人
ちかしとつゞるてこそあれんなるすべきなれば。
かうすればくるしきやうなるのちの空しやおもんと。
ここはかの人ばかりはのがしもこゝろよりさりて。
あるべきわざなれどもこゝろくるりもの(し)
ありがたきびざいろおもんぱかりのかきおもひこと
ものなどをみづからのおもんばかりとりあめべし。筈

とろうちとごうけくとぞおやしうむしぬれ
はぐゝゐるをかうさらうるくゝゐるをれ物もさう
べきまてがきうけさぐひもいでくれどいゑのこの
中まいおなを人まぬけぬる人のおるごとをもこのこ
えけるとぞこゝろ院のれまへまて、こゝろち内(さい)
靭(えん)をいづれかハさ面ぐ、とりぐのざえまりもせ
給ハざりけんその中まもとりそこゝろ(源ノ)れこゝろま
いれて、つゝへうけうしをこまへるかひありて、ぬん
ざいをばさう物まていたずさしぬことの中まは、
琴(きん)ひかをぬふことなんいちのざえまて、つぎま
もまとづえ琵琶(びわ)さうのことをなん、けぎくり



なしひぬるとうへもあばしのこまきをき世の人
志かあまひ男しさをこうを思ハなを筆のつゞそ
すさひさをぬふおぐことこそしひこまへしかど
いとかうまさなきまでいかへのすゞかさのどる
せ紙をくらうなしひべかりハかへりてハしかぬひぎ
なりとおぼえれて男しぬひて思ひなきまや院の御
こと男し出ておしきれぬれ世余日の月指出てこ
なさハまぐさやかなるのどしかるの中ありしき程なる
よかんのつきの御こゝめし出て様中納言ひぐん給ハり
給さハいへどくへよハまさりてかさこそぬへりこさうの
御こと おとぐさんびしくかねの令嫁つうまつるべん

べの中にはてゞれたるを石(ゆ)て、そうし給ひ、いうじう
面白し。あけたつるまゝに。花の夏も人のれうちも時の
うゝこえて。鳥のさえづる程。心ちゆきめでたきあさ
ぼらけや。ろくぜハ中(若つが)夏の此方より給ひ。こゝハ此ぞ。文
なきまて給ひ給ふ。此のことにハ。此恵の定(さだめ)をしまふ。
れらしくのまきハ中(若つが)夏にさふらしきまへとこそて(源ノ)
さを給ふれバ。これがたじめ。文のうりのまきくゆ(若つが)し
がきまへど。今(源詞)つぎくにと。すゝ給ふ。うへにも此心
ゆきまて見しめしたるを。焼(うれ)しくこなり給ふ。それ
きことにつけてもかうもてなし。見しまへバ。種(ゆん)中納言ハ
私おぼしをさるべきにやと。心やましう見さるべきあるを

69038
6AP78